開卷驚奇俠客傳　第三集　全五

へ13
3157
15

開巻驚奇侠客傳第三集巻之五

東都　曲亭主人編次

第二十九回　貪隆光千速に他賊を驅る　長総逆旅に騙局に遭ふ

姑摩姫が那夜艾庭に鳴く虫の音に殺氣あるを知りぬる綷の顛末は且休題先説當日河内州石川郡なる千劍破村の稍畫處に五十槌電次隆光と喚做る強人の頭領ありけり。初は山名陸奥守氏清が隊に隷る紀路の野武士なりしに北朝の康應元年[南朝元中六年]己巳の冬十二月氏清謀反によりて滅亡の折隆光は辛くも戦場を脱れてより河内なる千劍破の由縁ある[illegible]に就て楠正勝に従ひしに正勝敢これを用ひず左右なる程に南朝は元中の季まで[illegible]楠武略もおとろへ[illegible]しかれば正勝竟に千劍破を落て迹を十津川に埋め折隆光は畠山基国に降参せまく欲せしかども心術表裏の癖着あるよしその聞えあるにより基國これを退けて其降参を受ず[illegible]隆

金長
帯五
へ 13 3157 15
大傳馬塩町

る光の技術を示す千劍破村に僑居せんとせ人の空房を求め膝を容れて武藝を那這人に教ゆ
考稍生活ふ考れども口を餬ふる足らざれば飢渇に及ぶ日多きるに人窃に見れば邪智起る隆光
素より武藝に秀で膂力に十人に敵もべく穿窬の術を克せるのみ鄙語に萬能一芸
善悪考へず殘忍を斷悪の癖あれ早晩不良心發して遠く野に出山に立て前徑を点
せ日夜に或は墻を踰堀を渡て竊に金山稀無ぶ迹を接すく欲する同氣相求る這
那の人間を察知して武藝の弟子に做し乾児と倡へて悪事を幇助るのヨカを
隆光是を猛可に富て家を廣く郷士と稱て陽に武藝の師範を陰に夜掙を
宗と做す石川郡の民家を犯さ倘他郷より来る盜児あれば五十槌の隊を隷ざれば隆光
必ず知て憎ふと仇のごく住處を洗獵し捕らへて立地に殺しけるあるを外に来る
盜児は地方の好民悪少年も悄々地に怕れ相敬言めて竊盜の悪事を做ものなければ
一郡通て肅静を路に送ると拾ふ夜鎖でも患ふる民の称べ

遊侠就盛も件のように成て這隆光を強人の頭領と呼ぶ他に如ヨク地
方の好城を求べしを最悪く呼ぶ然ば又這隆光が獨子に雷九郎隆成と做る境
勇の癖者に乳臭稚を後生れども身長五尺七八寸武藝に力量父に穿窬の術を親に
劣らず修煉れば年十四五の一比に隆光と共伴に近國他郷に赴て夜掙を事とせ
去も十六年本に成る隨に父が折々他郷に到る有一日悄々地に諫る中世の鄙語に盜覚
ふも仁義に狭ふと称ふ時宜に依て顧ふ這石川の郡内に寺に七堂伽藍の民
ふも豪農富商ヨカに這辟近に貨財を合て遥に他郷に赴く此の獲物に有り
て往返の盤纏に費せば労多に功ヨカ少に依て遠に挙ると千劍破赤坂龍泉
寺水越山顛の這方に荘院を却て大寺に他郷に赴く労を大利に這議に
儘一の言と賢達て耳に聴ぶ頭を掉て和郎が意見に近に利を見て遠
慮を知ぶる我身年来這里に在て徒黨を聚合て緑林白波の夜掙を事と

まれども。這地を犯さとすれば。地方の人に愛敬せられて。真面目と知るものあらば。然るを和郎が如く。今より這地を掠奪せば。縛遂に發覺れて。遊佐より緝捕使と向られんの折戦を利あらざるの長久の計ひあらば。小児輩も意見島許と誇負に懲りて。折々雷九郎隆光を他郷に挿りに遣はす。村人中より伴て武者修行と與と唱て。雲館奇峯五曽々利鼠坊八白鮫振平。出水挺頭三木綿張荷二郎等と喚做る。宗徒の強人。厮徒にその身に無ふ宿所に在り。浮る雲の富に儘して酒に戯れば。樂しとせば色に戯れ。欲ひとせば醉て眠り。覚て又喫む人間の歡樂は此の外あらじと思はる。這電次隆光が妻。鄙に世を逝て近屬一個の側室を迎る。姿の花に盛過ぎて。年は四十に近くとも。よく媚れば隆光只顧愛欲に。一家児を任用ひて是を其人休題。另に解出せば。二三回の長説話に。看官猜ひざるもあらんを。何事ぞと尋ねる。富義に袷笠に。夜二郎と共伴に相模の氣賀に立退く。藤白安同の鬼妻長総が旅宿の事。頭末は。姑摩姫殺

氣を知る段より。茲に至て説話二路に分れて。後章に一路は合ふ。看官徐に学べ。間説休題扨も小後長総に。良人藤白安同が死後にその罪見れて。従類氣賀と逐れ。折能陽出身の小夜二郎とのそ夫婦よりんと。間財を腰に。衣裳も綾羅錦繡を。行裏に藏めて。小夜二郎に駝して足柄山をぞ踰て。遠近を花の都路へかぞつ。もく程に駿河の喜瀬川の頭より。年は二十五六也。嚏嚏の旅客の細小なる三箇の行裏を。肩の前後へ。ち被て菅笠を戴たるが後に跟て。先に立て。折々のぞいかるに。小夜二郎が長総に目を注して。応せず。快郎さんと。呼ぶ。故意茶店に立よりて。憩へば。他も憩に猛可に。出て快走れば。他も快走りて。生憎に賞縁なを。其術もなく困ずる。小夜二郎は傾く日影を。うち仰ぎ。瞻て。然氣なく。長総といそがして。卒富士川をぞ渡て。今宵の歇店に着んと。走りて。馬頭上に赴て。前岸より漕寄る。船を姑且。程に。旅もく。経紀人に。ある。ん一個の伴當と共伴に先に来て。船をもて。在り。方僅小夜二郎に。跟て来る。五人。

熟視々。忽地聲を張り立て。噫。竊盗奴が大胆る。這方さの鎌倉を。我生活の花主るふ圏套を拵んと欲まる。我が這東海道を。年に六回も七回も往還りする甲斐ふ。汝が面が認りたら。然でもいるぞや。るが貫緣らべで荘官許奉ひそめて目ふ物でせんと敷囲に猛く罵りるぐら立向へば多人驚に推禁めそやよ親方よそる邪猜こ這方さの旅熟ぜとそ。去向を屋敷向れ。が。默止くくて共侶ふ来るを痛く叱るとろ。噫我ぐら鈍ま走一走いてそそ来んとの。瞞めても夕照ふ拵損ひたる業雲の果敢るく剥る五月の天の暮程ふと遽く東を投てかるゆ。开方を小雨妾時目送りる。長総い小夜三郎と面と瞑。吻と息つて。倶ふ件の旅客ふ。ら向ひ揖讓く。ひと陳る程ふ。舳父い船を操る。辛く這方へ来ふれ。皆共侶ふいそ。く船ふるる。来る。漕く前面へ渡けり。徒而件の旅客い小夜三郎が。

とそ。ぬく。詞徐ふ告るやう。在下い鎌倉の本町を。百貫屋絹七と喚ぶる。經紀人で。京師ふ光舗あり。那里ろ。から。東西を鎌倉を。商ふもの。又東ふる名物を。京師へも遣く。交易と上昔と。兄ぶ。年の内ふ。両三度上下りをせざるとる。今番い京師ふ。賜もあ。ぶ。と。合ん。與ふ。東西と。亦。せ。ぶ。恁い身輕く旅をまるえまるとれば故ふる。欲猶。抄。若方さの。脚小と伴ひ。何里を投て。赴ふ。這頭ふ。護麻ふ灰と。喚ぶる小賊の。ふ。く徘徊るとあると。不知。案内の旅客い。他ぶ。為ふ謀られ。盤。貫い。ゆ。行裏を。奪。暮。い。稀。と。そ。在下。這。を知。れい。郷。ふ。和君。ら。の。護麻ふ灰ふ。眼。られ。最。難。ふ。ん。ぶ。ん。ふ。猜。て。禍鬼と。禳。ひ。ま。ら。せ。ひ。ら。然。ば。と。又。那。奴。ぐ。引。返。跟。て。ま。て。貫。緣。ら。べ。ば。ま。ら。ら。這。中。の。江。と。吹。上。津。の。間。ふ。七。難。阪。と。喚。做。る。豈。取。も。難。義。の。荒。磯。ら。那。里。を。旅。客。の。前。力。徑。ふ。殺。されたりけるも。幾。名。狡。あ。と。伊。忠。七。難。の。名。い。ふ。る。所。以。る。ん。倘。京。師。ふ。ぬ。ぐ。在。下。伴。ひ。ま。ら。せ。ん。在。下。い。定。宿。あ。る。今。宵。い。澳。津。へ。到。ん。と。欲。ま。そ。せ。の。と。為。く。慈

富士川馬頭絹七懲騙賊
むち内
きぬ七
ひまのえん
あん二
有像第四十

さとう
五

められても怖氣生くも難波へ向ひぬと西下なする長総を扶掖なる小夜二郎ハ絹七ニ答るやう。ともかくも洞奎差らぬ。我们ハ這回が初旅なれバ這脚小ハ我狀家の艱ニ身を措難て相模より京師なる。所親を便着ニ適まく欲を見らる如く婦人を倶したる。進退不便に旅ならば今朝より女人ニ跟られて她我回欲都とえと欲しれども不如意なる殆困ドたりける料を和殿ニ救れて初て安堵の思をなしぬ。和殿も京師へ赴るのなれバそれこそ幸ひなるかな。なれバ封助を願ふのみと。いへバ長総も共侶ニ又欽びを陳てなら。旅ハ行伴世ハ好意と欲外ニ少なる世の常言もあへバ今此我上なる那女人ニ置縁れてせんかたなかりしその折の心を猜しぬるか。倘ん救ひニ遇ざりせバ東西を喪ふのミならず七難阪の頭ニ命果敢なくなりぬるもせん危なるまで待りなんといへバ絹七點頭て然ん。さ在下なれバこそ。初よりしてニすさを留善りて救ひけるなれども。憶ハ然開首ニて好造化ニ遇ひぬるハ神佛の利益ニてそはれ現深信いもつべきものぞと楽ニ就て一條の過去来話説のはへ長途の疲労を慰る與ゆもなきが。听める。在下幼稚なりし折且母ニ鶴岡の社壇ニ詣て遊び

鎖しけひしニ。有一日かへさニ社前なる石階を下るとて上一二段の程よりそゞろに足を蹈外して。譬ハ米苞を輾まし如く幾十數の石階を下まで滾落しかバ頭を破り手足を損じて忽地息絶けりしと。親が年来八幡宮を信しまうし冥助にや憑りけん。その夜艾甦生りて日を經て痍ハ愈ぬれども。なほ額頭ニも足ニも舊瘡の瘢ヨヌかるハ那折ニ禀る撲傷の殘り也。冥なせので在下も八幡宮を初めなまり諸神諸井を念ずる。一日も懈りけるべからず。冥助もあるらん本錢をヨヌく要ヌ纏ひて。京師へ赴ぬれても賊難ヌ遇しとあるに。各位も大くならぬ信者ニてそまを。然まだけの厄難を輒く免れぬらんやといふニ長総も小夜二郎も寔ニ然なと答るのミ。竊ニ回を照して心裏恥しくおもひける。古ゝ姑くまで絹七ハ小夜二郎をあざ嘲て嘻噫。心屬けがれ背ニなるニ行裏の最も重けになるニ我伴當ニ駝して他ハ俗ニ上下と喚る。旅ゆく人の伴ヌ立て主の行李を肩ニしつ道中の諸雜費の損益を知るものなれバ央ぞて倶まで来ぬるに駝しぬるけしなあらバといふヌ件の伴當ハ立留りて遽しく小夜二郎ニうち對ひて。

卒なん擔物を駝ひまゐらせん。鮮御しあれぞやとなすを小夜二郎ハなほ推辞て。それを辰すくけへども。今宵の歇店も近着ぬらんなの佟駝ふさいなんのをとなふ。伴當ハ強難て。後ふ限ぞりゆく程よ。並樹の頭ふ馬を繋ぎて。旅客を見ますつ一個の馬奴あり。小夜二郎们を喚かけて。かへさ馬なり。足廉くせん。澳津まで乗ねべきぞや。遣るべしと薦るを。絹七ぬ母く立對ひて。價を論じ馬を央ぎて。小夜二郎が行裏を鞍下ふ附させて。却長総を乗まる折。絹七ハ馬の尻骨を見やてまそら擹揃て。やよや馬奴。心を屬よ。夏の馬ハ蠅ふ悩こそ。鞍安からぬものぞかし。小篠折もそ蠅を拂ひなば跌せるよく追てよとなふを。馬奴ハ吩あへぎぞ。寔ふなるちてなるらず。我馬ハ性も足攄も徐なればれバ鞍味妙ふいそぶせぬ。暮のなせんと答も果ず牽出せバ。上ふ搖めく長総ハ。噫咕ゑとあせ掛る鞍ふ引添ふ小夜二郎。落しハせじと慰めて。絹七主僕共侶ふ。馬よ續ひて走りしかども。薩埵山を踰果る時。候日ハ既ふ暮しかバ。辛く澳津の驛よ來ふけり。登時。絹七ハ我定宿なればとて。驛盡處なる飯店の門傭ふ馬を駐めさして。長総を扶下し。馬奴ふハ行裏を解し銭を還し。大家裏面ふ栈を入まバ。這里なる雛婢出迎て。わらぢ着せぬバいかならむとて湯を汲へる。盥を讓る絹七小夜二郎も。洪に長総を先へ登らせ足を洗ふて。引れて坐まる客の間ふ。早の馳走ハ薄明き行燈一ッと。中坐席横臥あへと。合まる木枕四ッハ。油染て箱ゆも似たり。四人の外ふ。厮宿の客なかりしかバ。猛可よ燒く風爐。炊く飯遅き夜食を。待る不樂さ。腹は虫鳴く草枕。旅ゆあれど笥ゆも裝る。中酒の餚ハ。絹七が今宵の東道と誂へし。澳津棘鬣の濱焼なる。薩埵浦なる榮螺の殼焼なる。是けふの椎鬱も。馬恙もわすれて最愛たし。過しぬへと差ある。推辞も更ぬ酒ハ。餘念長総も沙量なるねど。團坐まて。深るも知らぬ小夜二郎。隔昨氣習を立やしより。左ゆも右ゆも影護くて。昨夜の歇店でハ宿も睡らればけふハいとど疲労れふ料を好伴侶となりて。今宵ハ枕を高う寝る。加貝び酒ハ我们が東道なるべきを反覆なる情ふてぞ受しく。大原盃やせ臑を顕出ふ崩を灸ゑ肉夾めバ。口を指せもし。躬て囃る。舞礼酒與ゑ嵩言ふ[illegible]もうち解て。これバ箸を突立て。ゆうさてまの睦しい浮世雑談。時移るまで酔を盡し。て不盃を收

折て長総が浄瑠璃を小夜二郎咱們も倶に身を起て坐席のうらへ衝脚扶甲斐なく紅女を
て。鍔児離れぬ縁頼の扇戸開て小鮮と達と許しめと絹七に辞と臥簟又入りしへ絹七主
僕が次の間へ懸を吊し。行燈と三房の間に措更さと。倶に枕は就ぬけ。百夜の夜長ければ短き
夜二郎と長総が連日長途に苦辛あるに今宵のみ稍幇助を得て心あらずそ上に小夜深
るまで酒うち喫て醉て熟睡とあるうち鶏鳴に日い升ても枕を雙べて臥ぬ。歌店の婢
児に喚覚されてうち驚いて遽く身を起て次の間をうれば絹七主僕が在ず。何里へか。と
婢児に問へば那二方あれ伴侶さあり驚に緊要のあれば夫と云ふ小夜二郎長総
も倶に驚て且訝り。蒲團の下に秘措に。盤纏と急に掻捞に悲しや財嚢へ
是のみあるぞと小夜二郎が両刀行裏腰着の銭と倶に枕方に解て措に。男女三條の帯
まで。掻攫れけん東西皆あらず。原来那奴們も女人艱計の騙児にありけるとは。心を緩せし
千慮の一失悔しや。と歎息に驚る小夜二郎と慰め難く長総も色と失に呆惑ひたりに。

いふせんと聲戦しても敵るあらければ小夜二郎が歌店の婢児の立んとせしを喚禁めそなれ衝妻
且等ね縦両個の奴們が未明に出てもくとも。若們我に告ずして出るとあるは。慥に済ず。
亭主と召。快召ずと。苛高に聲に主人が走来て寛解て仔細と詰ふに小夜二郎が東西
皆耗る。縛の趣箇様々と詞急迫く舒示と。猜ふに那二人が奪ひて未明に走りし
若們情由と知ずとも。その折我に告ずと。遣りに越度と況這里に那奴們が定宿と
ひ騙児の中宿狡這疑ひを解んとすれば快那奴們を趕蒐て牽揭戻と證に事
克ずば金銀両刀衣裳も送く償せん。孰の方にも脱れあり。下心せよと膝うち鳴と。その隨に
譏ずも。主人が听ず嘆息と。そが寛とすれば。先に出て夜のひとるに今乗が初宿に何里の人
狡咱們が認ずあり。オを親げに。歌店と倶に去ぬれば。咱們が同盟同幻の一隊と云ふ。
るに那二人が欺に要のあれば立寄る里へ快して残る伴侶男途に會ん這我が隊て両個の
伴侶も領意れべとのれ。然もあるべと。ひとりの。亮も疑に筋あり。禁めそなれに告ぐ。

盤纏幷ふ初裏の皆紙うと宣へども然る大切の東西るべ。ぞこや甲夜ふ可ふ估と預け玉いざる。倘預りて喪欠外より入りくる盗見るべ償ひもせべ紙れど預けもなせば同約の先へもあれたれば。そ。のー罵りあいてるるて。疑へ両個の伴達ふ東西皆齋ー出ー遣りて還て主人と主ーるる。伎倆も世ーあるるるーべ抑ちん多い孰の里ろ。何里へ赴くのるる。又那両個の同約人ハ甚麼なる好で最親ー。歌店と倶ふ来あるくる本貫姓名去向まで名告ーず。驛長ふ訴ー明々暗々と立ん騙児の中宿るるべーるンどのれてふ外聞ヲくて。活業の障ん。快々名告ぬるべと。弱くるえても理ふ強ん執筆返ーふ小夜二郎それいとだろ息逼る。肚裏ふ思ふ。主人の論難極めて理ある。我身逆旅ふ熟ざる故ふ。盤纏を預ることと知ぎ且騙児絹七ハ。富士川ようの同約るるふ最も親ーを友ひて。小夜深るまで酒うち喫て。熟睡ー走らせーて還て人を外ふ。よくも思ふ怒ーるる。刻本貫舊主の姓名。今番旅行の情由まで。主人ハ報ハ妙るーぞ。いふ志を思ふ難。悄と長総の袂を曳て。倶ふ次の間ー退て。綽の難渋恁ーを

耳語ー示ーて。その意見を乎るふ。長総ハ口ハ呆果て。計の岩所を知ぎ。左右ふ綽ーるる。外ハ分別ふれ小夜二郎いふ。困ぞ又長総と共伴ふ。舊ふ坐席ふ出て来る面と和け主人ふ對ひ。目今ハれー綽の趣ハ。その理るるまーぞ我ハ鎌倉の人氏。袖笠小夜二郎と喚做りて。乞ー主君ふとハ。今番ハ妖ぞ京師ハ送る。秘の旅るれ。主君と明ら地ふ名告ーるかなる。又那両個の旅客ハ箇様々々のるふ。けふ半日の約伴るれ。路ふ賊難と拯れる。好意を感ー誘ーれて歌店ー倶ふ来るるる。又那奴ハ。已前の賊の覇計ーるけ。那国奈ふ樹ーて。我年少ーとハ。然ーも悟ーて甚麼ぞ武士ーるるるる。等ハ去れ一期の不祥。今ハふ面目ー。既ふ東西皆喪ハ。進退越ふ谷ーて。這義を以驛長ふ告て。両個ー人の往方と。ぞ。ぬ。ふ。綽の便宜ーるるまぞ。幾日も這留ぞ。ふ。主人ハ又呆れて。原来綽皆ハ身の由断甘く。来せれ。ぬ。縦驛長ふ。ー生て。賊の往方と。ぞ。ふ。ー。虚々と。這頭ふ足を駐ん。ぞ。今ハも尻ふ帆樹て。亜細亞歌邏巴へ。る走ーるーん。れども俗ふ。会ー行ーふ。

驛長に許て往方を索させんハ勿論逗留久しけれバ。旅費も嵩むべし。這義をうろうみ給ひね。と
利に疎からぬ期を推して。叔驛長にかくと報て地方の法度に任するのみ那夛人们の出処実名
定めてうかるうれバ。風と趕し影を合すとふ常言に似て。毫ずらも縡の便なからバ。小夜
二郎と長総ハ飯店の款待初に似ず。之次の饌も茶淘冷飯のみ喫へども。応するのみなれ。徒
然に堪ずして出ていかんと欲すれバ。鏢一文の盤纏なし。這里に留らんと欲すれバ。旅費の償な
くなるべし。苦しき胸を慰め難て。なかなか言のみ繰返しつ。商量果しなけれバ。照験もなき騙
賊们の捕らるる等すんより。左も右も京なる次貢る人のあるぞとも。繁華の地なれバ。生活も便宜を
得ることもなからんや。と雌雄總に尋思てなれ。這日主人を招よせて。小夜二郎が先に云ふ。不慮の身
也五三日厄会にあひし申斐もなく。那騙賊们が往方知れ候ハバ。其の後とても吉左右を聞えんとおもへど
かるべし。今ハしも此を捨て投て京へ赴くべけれど。稍尋思もされども售て盤費に充べき東西なし。但
我妹の頭に挿たる玳瑁の笄と。白銀の釵児二枚のみ。此ハ夜放さで臥されバ。幸ひにして奪去れざりし。

崑山の片玉ハぞ宜く財主をまで沽却しなバ。と憑む傍に長総ハ嗟嘆して会話を拡て
頭髪に挿る釵児と笄を徐と抜合すれバ鮮らうる黒髪を紈ねて。類歯を挿頭ハて島昇紙を
もて笄の脂膏をよく拭拭て。這笄ハ舊舶の玳瑁をもて造らしたれバ。耀もよし。疵も無し。製
作る折ハ十金餘を費しなるものなるを售るハ可愛き事を棄るよの世に最惜しくやも薄情
や。宝貨ハ身の差替も。能然別れがうなるなる又這白銀の釵児ハ面挿も背挿も八九錢の秤
目あり。損ハ預知のことなれバ。一毫でも價よく媒妁をしてのせし。と唧語ながらも不楽で遞與を
主人ハ受合て障子に翳し左見右見て現よろしくハあれども。傍ハ東西ハ素人の眼の届く
べくもあらず。非除初ハいかなる金を費しものにも。賣る折ハ世話もなし。只是三三足を出で交易の御意
申稱ひなるべし。且預りて那這をも見せて掙んハ小可とも合る錢あれバ一肩入ましくおふにおよ
疎き身を姑且等せむとる。と最憑しげに応をして。件の粧具を携へてハそそくさ奥へ退りけり。恁て
其の日も果敢なく暮て夕餐も果せし時候。主人ハ外より来て。小夜二郎们に報る事か御白に

憑れまゐらせたる笄と釵兒と驛の香具經紀人們に當て値を問ひけるに。よしや似ず廉かり
ければ素人ゆゑ那這と見せて買せんと欲せしに玉簪石簪もぞ知る人ぞ知れば粹敷おぼえて
彼の町尻なる鮮庫へもて來て笄釵兒二種を銀七拾五匁なれば鮮ね當んといひけらく賣んと
すれば六十匁の内外にして有ば廉かりき。典物に做ますとも二十三四匁も賣登て受復さんも自由
なりとて長總ら听て小夜二郎が意をはかりて膝を拭め主人に對ひて非除七十五匁にとも衡ふ
ここ二足も文然とて情ある時價外れて侍らんにはあらずや。典物になさば四十匁ばかりにてはあるべし。
それより上は借まじやと問ふを主人は听ておもしろからず七十五匁も錢回して討論て決着せるなれば
そぶ上は分及びかたかなるとかれども薦めまつる事ふかくは左も右も商量して後悔なきものぞといへば
小夜二郎點頭て現時價に當らずとも値を論ずる折にあらず今茲は旦集の出來ぬものあらけん。
箸ずゑ持出てあるとも輪有る錢賤に何日までか憎るべき京師に到る便りに就て受復
さん與るれば柱て七の字なるべし那識に儘しあらずとるに長總嘆口氣して隨上示合商

ゑ量るねば質と決めて蜂掃に苦なる事只身の往方盤纏に足らぬ金なるからなれば優べし。奴
家も決着を絶て待るかしといへば主人は懐より報條一通合せしてまゐらせし金子を且小可の色
易て勘定仕らん。僦債は今夜の初歇が四人前ばかりでもある銀六匁當晩の酒と餚の値が
拾六匁五分その次は日より泊二人前一个日が三匁五分日合して拾五匁這那大約今宵まで總
ヨメ宮泰三拾七匁五分は渡し下さるべしとて拾五匁を差引見れば金弐分弐朱卒々受合主
へりといひつつぬからず懐より件の金を合せ出て開たる報條に乘して恭しく遞與せんとも倶に
呆るる長總小夜二郎を照し艶然として御亭主そも貪慾なる哉我們二人の僦債は當然なる
るとも那一人們が僦債と那奴們が買合せる酒餚の値までも差引合されて可らんそれの議は
けて決して受引まじと男女齊一敦圍くと主人は听て推禁せも悲憤りの留一文でも受ずと錢を
合するにかくば那朝先へ出て申されし那兩個の途行伴と仇のごとくに宜へども定言なれば行伴にあらずと
せうなく證はあまあるとかくかきさんや那夜分の酒餚は彼身二人と飽までに飲もたちべきあらざれ

白喫せんと六人ゑりの經紀人の聊る利を顧て宅眷を養ふ損亡何を所依ふせん。徒ふて也尾詩
ひるがへ是非ふ及ぶ驛長ふ報て地方の法則ふ儘せん。その折後悔あるとも讃ること云云ふ解
ても解縲紲ふ桀させ。質を捉られ上ゑれば小夜二郎も長総も爭ひ輸てゑる尾立腹を又ふ
押て默然ゑる。姑且と長総ふ小夜二郎をゑるそ。窮ゑるとふ鈍くゑるとふ鄙語もけふ外ふ
是飲ゑければ損の上ゑる損の卦と今建更ぎるもあるねど主も奴家も竊れて帶ゑるゑるとも爭
何いせん非除舊ふの布帶でも二條買ぐ。這貳分貳朱も殘微くゑる及べ。然でい盤費ふらく
足ゑぎ足ゑねばとそも媛御前の裸で道中做ゑるゑ狹這商誂とせまゑりけれとゑいふ夜二郎有理
有理と領ゑぎゑ主人ふ對て。听ゑ如ゑ造化ゑれ我いもあれ婦人帶一條を求るゑゑの。勘辯を
憑むのゑ報條の中一个條酒餚の値拾六文。分釐と小霎時貸ゑひさ京師ふ到らば便ふふ就く。
仞と返えと遠ゑ及べゑ及べ。ゑと長総も口說くと主人い听あ及ぶ小可とても鬼ゑねば最痛くゑ及
も連年活業不如意ゑ。人ふ貸ゑゑ餘財ゑ。多ゑ比旅客達の養れていゑれ小荷駝獸ふ

破れゑば一條ふ。長ふ二丈ふ近ゑるべ。目今食先ゑまゑ。ゑと三ツふ七結びゑば夏ふ帶ふ
究竟ゑんいでくと遽く身を起し納戸ふ退ゑそ件の布をあて來ゑるとゑれば薑黃と油緑ふ段
段筋の深布の下晡ふゑりまゑる色ともゑゑぎ糾れ垢脂深て長汀曲浦ふ渓水ふ蟹戸ふ樗
縄ふ似ゑり。長総ふ几彈ゑて世ゑ世であり。折ゑゑ寢間被帶ふも繻子狹綸子と腰ふ纏ひ
身ふ。ゑと貧富榮辱地と易て今ふ逆旅ふ流浪ゑいとて這破布と爭何ゑ。ゑふと小夜
二郎ふ尉めて。縱帶のゑ人並でも盤費ゑくてふ明日ゑゑ露宿何の日ふ狹京師ふ到ゑん雲と喚
ゑ驛奴ふ稟素と帶ふ做ゑもゑゑと垂折ゑる衣と引揚て垂隱さゑ及ふ優ゑて。姑且
堪忍ゑのと屋安諭ふ領せて。ゑふ裁て帶ふゑる。藍深川ふゑゑねども吉備の中ふゑゑく。夏
金絞ふ貳分貳朱の路費の與ゑ隨ゑゑ及人視も恥も今ゑふ潛び難たる長総ふ再ゑ
次嘆口氣と。徒ゑべと。豫ゑゑ及毛の杪ふ措く露ゑゑも知ゑゑゑあゑば丹澤ゑる我親黍
赴ゑ。侄ふ寓ゑて後ふゑ亦左も右もまべゑゑふ悔ゑゑをあてけゑと脇と噬めども返ふべゑ。

路に暮れば明日よりの去向苦しき煩禁に寝て安んと呟くの。傲きるるに頃日の甲夜眠癖
憑く夏の日の適才暮て程もなく小夜二郎と共侶の主人の羽為朝立に別を告て入る幽吊
緒もなく短夜や。遠州臥莖を敷栲の枕に安く就かけり。

第三十回　疑似の孽小夜二命を殞す
瘞金の計木綿張牢を越す

却説袷笠小夜二郎は長総を扶掖て京師を投て行く程に。あの日は七里三十六町の路を走りて
藤江田の里に宿を投めその次の日の巳牌時候に嶋田の驛に来りけるに折から五月の天なれば大
堰河の水倍々渡るあるべと雪えりが已とも這驛なる客店に杖を駐めて水の落るを
等たるにその夜より又雨降て幾日も霽間なく逗留十日まるに及びて稍渡れとなれど
も盤費の逗留の宿賃と歩渡の人足賃に残りなく使い果て金谷の里に到り折から
黄昏にあれども宿に未だ便着あるべき鶏鬼恁まで身に逼て憂ひに患ひを思ひ煩る小

夜二郎は長総と倶に路傍に立在て宿借る人を羨ましげに目送る程に日は没果てタ裏に門
鎖せる家の其里ともなくぞ哀しく涙迭に吐て恨めしくも哀しく悔の八千遍百千遍甲斐
なき繰返せ共環なき糸に糾る心細さを慰めん慰められて共侶に金谷阪まで行く程に
山田の頭に野猪逐に穂屋あるを戍る人のまろしかば今宵は這里に明さんとて件の穂屋に臥し
たれども餓疲れるるに上に山川の音凄しくて睡らんとすれども短夜なれば今宵の生
憎に長く覚て稍暁くるに一時候旅客を乗せ行く馬の鈴の音ゆえに小夜二郎は
長総と又扶掖て山路を登りて菊川のくに辿りゆく明るんとするに夜いまだ明ぬ三十町餘
も来るるに程に小夜二郎は憶ぬに足に高哩と蹴躓て東西あり驚いてあらぬ合の抗く
月を燭に熟視れば長二尺計なる糸柄の刀に莞爾とえ笑くるに戴て刀自らに。これをその時
憶ぬに今足に蹴躓て這個刀を拾ひ長総も合笑て現捨の神あれば助る神あり
と宜く我が一名の命運なるに憑りた所あり且せのとるに合て刀の好に知るべき敷を

あり。表壮衣のいとよのくしけれバ是ふ售らバ必盤費ふならん。愛宕阿足ハ出来ろと祝して遮与ぞ。小夜二郎ハ受合ろ腰ふ帯て是を今宵の歇店主人ふ示して售んといへど那斧より欽覺より。適方なくて價好らん是で氣蝕を醫しろ卒も兎も先ふ立ろ慾も饑も忘て草路夏草踏ぬけて又飛町ろ登り行く左あくもとえろれバ乾浄る樹下ふ山神の禿倉あり。けろ長總ハ小夜二郎ふ撥れて這頭へ来りろ折天ハ稍明て茂林を離ろ鴉の聲ハ傳ゆれども官人跡の絶れバ姑且那里ふ憩んとて聊路を横ぎりて件の禿倉ふ立寄りしふ主もなき一箇の箱籠あり。小夜二郎も長総も是を何人欽卸し措て出恭ふや行ぬらん。しバ敢掛念せバ。御ふ拾ひし刀を會出て送ふなろ價を料りて憶ぎ時を移せども箱籠の主ハ出ても来ず。小夜二ハ猛可ふ心つきて長総ふ耳語くやうあん。身いろふそあひてる這箱籠の重げなる内なる衣物ならん。然るを徒ふ山中ふうち棄たるハ盗賊なる盗児の所為なる欽。然ぞとも所以なりしぞや。そる左もあれ右もあれ天の與るを取らざれバ還て咎めを受ると欽ふ古語あるぞ。誰ふか憚る。消々地ふ他所へもて

> 新古今集 羇旅 西行法師
> としたけて又こゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山

ひて售らバ盤費ふ餘りある。京師ふ到る日生活の本錢ふならんも知るべからず。先々内を一見して當値をせんと箭欽索ふ手を掛て束寄せんとせしを長総急ふ推禁めて四下をみろり聲を潜めてそのへ這箱籠ハ最大なる鎖を鎖なるふ斷鑰なれバ容易ふて速ふ披るべき其頭ふ暇を費す程ふ備這主がかへり来て駝めて去べ爭何ハせん今うち披ずてあれども衣あらバ何りあらん。快々他所へもていろぎ去。害の山へ入りなバ釘を空すろも悔あらぬぞ。といふふ小夜二郎點頭てかゝれバ現その理あり今又必ヘバ這刀も箱籠と共ふ贓せし奴が合追送せし欽料りかゝろ。非除然る東西るいぞとも手ふそれバ合を復されん幸ある天の錫を猶豫して時を移さんや這山の名と異るら焉我名も小夜の明てより好造化ふ安波が嶽の間の鐘ハ撞ずとも金ふなるべき一箱籠吁奇る哉腰らけてまづ駝ふべしと重ハ荷や衣裳えけり紗綾み中綿紐らべ駝せんと侍ひあへと誇る虚口軽けれど重き箱籠を端近く引揭寄せろ箭欽索を肩を容ても非力ふ悲しき。声のミ曳で艶冶郎是ハ捗ぬとうち卸もといふ甲斐なし。と長総ハ背ふ立ちて徐ふて目交

三輯三冊目終

為ふと両個の笠と箱籠の上より結吊て下ふるを抵け推揚るを封手ホヤッと小夜二郎い拾起せ一脚踏固めて徒身ホ附て。急車り後より徐ホ推めへ卒也くべ一と先ホたつこう張め心昨夜より饑て奴カ力十倍の慾ホ屈せ及ぶと又めど折々弁弁く足曳の山路を辿りも程ホ前面より来る一隊の荘客約莫十名許ふく棒と引提て近つく隨ホ小夜二郎が駝る箱籠と認りけん迭ホ手目と注しと立留るあり。走るあり前後より這雌雄と失々と捕綱てもそれ強人逃さんや。胡奴郎い昨夜初更の間ホ咱家が村ホ艘二の宿所を張り潜入て主人を惨く殺せ一ホ屍骸を那里ホ捨ふ臥房ホ送る鮮血を敷れ一ホ分明るホの折一箇の衣箱籠の失ふ盗賊の所為ふけりと知れ一と艘二の老小鈍梅が外りから来て報ふ時を移さず村人が聚合い詮議と。艘二が亡骸と賊の往方と那這と終夜索ホ這里を遭ひい天の眞罰縱非むと爭ふともその衣箱籠の笈索ハ鈍梅が敝布の小裁とあてる迭ホ考ふとふ染色さも詳ホ。ゆ一ホ違奴平ホ證据今ハも脱る路ふ。箱籠とふ卸と。索ホ係れと諸聲猛く棒突鳴して闘くの素是田野の民ふれ小夜二郎が腰ホ帯ふる刀ホ武勇と料り難て左右ふ敷も慈善の心ふと背ホ考ふと甚麽ホ濡衣と被せん與欲人を害して東西と奪ひ強人ふんとせふ。左疎忽とハふくの既ホ主ある箱籠ふ一が卒返せべ一受合ふ也とふせも果ホ又嘘く大家眼と瞪して誘ふ強人奴ふの箱籠ホ脚ふ獨這頭ホ来ふ一ホんハ偷ふ東西ふ瞞ふとも詐ホ吭んのふハ然ハふ一ホ浅ふふの口瞞ふとも詐ホ吭んのふハ闪ふと敷ふんと我ホ勢ひと禁むべふ一ホれが小夜二郎い吐嗟とだふホ刀と見光りと引抜て寄せと角へと身単ふで後方ホ叫ぶ長総と駝搭ひ箱籠ホ心と肩も引れて進退不便の受大刀取次ホ兵兵て。怯む眉間を下高ホ敷ふれて苦と叫ぶも殿居ホ撞と平張る郤舎ホ駝ひ箱籠ホ底

抜けて内より出るハ衣物をも斫られし人の亡骸なりと駭く長総より大家ハ争く心付て原来這奴が
皺三が屍骸を人にしらせじとて箱籠と共に盗み出て衣を轉して空箱籠へ推隠したる亡骸の頭を撫
ならん天罰を虐滅されんと逃ると罵りつゝ又掣たる棒の背にかくる長総ハ噫悲しやと声を立て泣つ叫びつ
俯男なりて禁めても聴ぬ血氣の壮佼這衝妻奴も同類なりんと妨げたると襟上を攫抓て引摺寄
せて躯て索もて捆けたる登時大家棒をもて仆伏したる小夜二郎を突動し又突動しすれど初
一撃にて酷く眉間を破られし竆所なれバ些少も似ず三魂六魄五體を去りて又生べくもあらざれバ先
そのよしを村長に報て領主に訴んとて部もの二両名麓を投て走るもあり或ハ程遠からぬ山里人に
よりて報て地方の法則を憑るもあり這宅ハ両個の亡骸と長総とを戍りて姑且便宜を等程に
皺三が妻鈍梅ハ走り還りし村人に縡の趣を傳知りて泣膧しては瞖む目にころぶ山路をいそぎ来て歎
れ弥増て良人の屍骸に携着れて伏沈む涙の間に小夜二郎が亡骸を見て長総を佗と疾視へる
恨の目星眼狂ふが如く罵る折から近れ山里の毎も那這より聚ひ来る村長ハ這地の領主

曽根川權頭高春の家臣橘高獦九郎有事に案内をたて倶に這里へ来合けるに法を領
主の家臣ハ速に出て来たまへ看官許し給ふもあらんなれど亦別なる故にあらず昨夜皺三が宿所に強
人入りて衣箱籠を窃ち奔りし折皺三ハ在らざりしかバ臥房に鮮血倦るとぞ云ふ村長が訴によりて其の強
人を穿鑿の與橋高獦九郎ハ彩兵を将て件の村に来り折村人們が小夜の中山で那強人を拿
殺し仆したるを党なる一個の女を搦捕て縡の趣を村長に報じバ獦九郎ハ村長によりて勢案
内に立て来て詮議に及びし登時皺三が妻鈍梅ハ涙を禁あへず恭しく獦九郎にうち對ひて惶けれ
ども稟上ん賤妾ハ御采邑西花村の小經紀薮坂皺三が妻鈍梅と喚做れて徳に村長を
もて許まゐらせし良人皺三ハ年来疝積の持病あり昨日の黄昏に買賣を果て下かつ折から司
持病の発りしとて若ぎ倦ら臥し侍らしバ賤妾ハ薬を買のために来ぬ其と薫丸と云ふ此方の錢を懐に
して走りて隣村に赴きて還りて見れバ良人ハ在らで臥房に鮮血畳しく路に浸せしバ駭き叫びて四下を
尋ぬに倚の板廚に容措たる衣箱籠を失ひしが原来縡皆強人の所為ならべしと思ふに心の空を

良人のうへ西鄰の村人に報じ大家驚き謀立て然らば往方を追捕人を遣はし環索られ
御尚に件の強人の這里に在りしを出し殺し仆るるを見て走り来て問へば良人のと殿の強
人の背に負ふ賊物の箱籠より顕れ出でたりしもそれのみにて強人の腰に帯びる中刀に殺害の家什
物の箱籠と共に板厨の内に秘措たるを那強人に奪ひ疑ひ良人の仇村人は殺
されたりしかば怨を雪ぐに似たれども支黨の賊婦あり這の村人に問せあらば分明なりんと
いへば四老の村人は共倍に杖を出て恐れ畏まる禀上に小可毎に殺害の隣人某申しでは目今殺害
の妻鈍梅が殺害の件に小可毎に殺害と強人の往方を索て天明て這処へ来る折那強人は箱
籠と駕搭して女子と倶に立ち撞見せし箱籠の隊字知らず歛索に記あるを賊と決
猜して搦捕んとせけれど強人は刃を抜て殺拂々々脱去んとせしを脱さじと殺害の棒に
賊の眉間を破られて脆くも息絶えたれば却て細かにその来歴を譴問
賴陳て罪に伏せば勿論那頭領の強人は搦捕るべきなりしを那の刃を持られば勢ひ

さぶ不如意を殺害し聊疎忽に似れども勢ひ実に已むを得ざるの義を査しめかと
禀ずるに猪九郎うち叱て殺害と小夜二郎が骸を検る折村長たちを現殺害の肩と胸月に
刀瘡刀疵の瘡所の這肩の瘡は初分の胸は十字に刺る又這強人は新に花田紬の
単衣を被る由に似たり海松のごとく擦無き破布を帯ぶ身の皮皆具せざりしも是多人の
證据なを生拘るべきや支黨を守護の暇験あんを殺害せし惜むべし先に賊婦を拷
問せんとぶ村人たちは長総を牽立て猪九郎が面前へ索命迫て推居けり當下橋高
猪九郎は長総を見て疾視て出処来歴姓名と夜盗の顛末を責問ふ長総涙を吐て
陳ずる奴家は相模の某の里の京師の所親許赴くのを這人々に疑れ殺害せられ
我弟鈴笠小夜二郎と唤ぶ婦人の名と長総と唤る婦人は昨夜金谷に明
ある歌店に立寄て初て喻る這山路の荒祠に憩ひ折社壇に在りし那箱籠と小夜
二郎が出て箇様々々とぶよりて然ば里の主に返ねば竭る般若貴に資ふ

有のやせんと駝せしも。一向日に我们は騙児の為に盤費さへ初衷さへ咸窃れて被る侭なるに
帯ならもあらぬ苦しさに悔しや駝せし箱籠の故に人を殺せし盗児なりんとのみ夢にも
知らざりける誣言を只痛ましく弟が枉死寃屈の科は釋るも誰を憑み携わり遥る京師へ独り
るべき哀しかると声立てよゝとむせびに泣沈むを。猶九郎は少しも東を呵々とうち笑ひて賊婦奴頼む
もう尚只その箱籠のみならず小夜二郎とかの那強人の帯る刀は皺三が秘蔵の中刀と云ふ事其許
證据明白左でも右でも脱るゝ路なし。有つる随に招了せよと責れば長総涙を拭ひて那中刀は来
歴路も小夜二郎が不意く足に蹴倒せて拾ひ取りし窃みを得たるぞかし。とはいへども果も猶九郎は
眼を瞪し声苛立て。這奴酷胆太し。然る浅々しき撝鬼に小児をとも欺れやも柳若们が旧里は
相模にて何の里にて良人の姓名その身の素生今番投てもとらぬ京師の所親は甚麼なる者ぞ快
詳に白さずやと緊しく問れて長総はそれはとたゞ口訥る顔赧あかうなる迄も答難しやあらぬ
かし頭を拾げて我亡夫は鎌倉にも威勢ありし武士なれども這身に成て依るよ君吾が羞辱を

揩んの是。その義は免しぬ。又京師に憑りし親族あるにもあらねども馴し東に住不楽て含気
と倶に苟且に立出て旅宿に仮るとのみを猶九郎は冷笑ひて枚も這奴が口の強さよ女流なれども
暴くせで何いか究んと思ひしに守を欺く鳥許の癖者背と痛く鞭懲して招了させよと説聞せ
たる。下知に従ふ橋高の騶兵们齊一同と応て走り寄り長総が背を悩れ鞭十の電光撓れて
叫ぶ長総の声より初にかゝりしは猶九郎はこのときはそ騶兵に呵責を止めさせて鈍梅并村長と両所の
村人们に示さう。賊婦は実を吐ねども。徒まで證据亮然たれば皺三を害せる強人は同じも必定。
那小夜二郎に極れり。倭れば梟首せられんのみ。守よりあん下知あらん折まで屍骸は荼毗に成られ
べし。又皺三が亡骸は鈍梅が随意葬らせよ。尚不勘ぬべき事もあらば異日の沙汰に及ぶべしと厳に宣
説て。そね。猶九郎は
𢌞て曽根川の城にかへりゆく程に村長と村人は長総を牽立て騶兵の後に従ひて城内までぞ送り
ける。這日より長総は久しく獄舎に繋れて拷問数回に及びしかども苦痛を忍びて。此も屈せず奴
家は少しも小夜二郎は箱籠を窃まず人を殺さず。似るによりて疑れしは是薄命にて候と。

責殺さるゝとも知ざるを做せりといふべきず。唯冤枉と叫ぶのミなりけり。その志一男にて恥を
知るものなれバ。ねぶるも。身ハ中々易しといへど小夜二郎を殺されたる怨によりて死を怕れず。その冤を雪ぐ
こそ倶に死めと思ふのミなり。それを有司們もやうやくに疑念起りて罪を定むることをしバらくとゞめ。主君ハ
妙えなきぞ縛の理會を問ふれバ高春（權頭 通根川）頭を傾けて怪る疑獄ハ縛をも急がで時を俟べきが
づら虚実を知らるを照驗あらんよ。緝捕の雜兵らに封内なる一人を駈捕せよと命せる。
よりて秋より冬に至て搦捕るものゝあれど。そハ無頼の博徒ならねバ白日挣の小賊にて長総が疑
獄の與に照驗になるべくもあらず。その罪重きハ首を刎られ輕きハ追放せらるゝ。そののち一個の罪人
あり。名を本綿張荷二郎と喚做る出没不測の草賊なり。此が獄舎に繋がる折牢れて女囚牢の
頭を過りしかバ憶ずも長総と自他面を照せしに長総ハ何と思ひけん面善あるに似たれども折から瞟
れ皆のるにしてよく相定ねバ。獄舎せぞ那荷二郎ハ長総をえくくりて鄰れる獄舎に繋がれ
けり。その時在囚の罪人ハ荷二郎と長総と只這男女二名のミ。獄舎ハ雌雄の差別あれども板壁

一隔なりければ咳く聲まで聞えながら面を相見ることなかりける。這獄舎預ハ塚見木兎六と喚做たり。
その性剋薄貪婪にて地獄の沙汰も黄金佛の光によりて賞罰あり。長総と荷二郎ハ素
より錢あるものならねバ木兎六ハ毫ばかりも佛眼をもて他們を相ず。時に鳥雀ハ食難て夕陽に
啼く鴻鴈ハ夜に聲して雨雪を催ます年の尾りになりしかバ獄舎に囚徒稀なれども荷二郎と長
総ハ尋常の罪人ならぬ故に癖者なればとて木兎六ハ獄卒の憐まるゝを罵り懲して間なく時ハ
くこれを成らせその身も日に三次夜も三次づゝ輪り忘を屬て此も此も閑ならず既に日を僂る十二
月下旬に至りて春を迎る縛ヨヌけれバや木兎六ハ稍怠りて昼夜六番ながらも巡りて況獄卒們ハ
火を索て獄屋の頭に在る折ヨヌクロ荷二郎ハこれに便りを得て有一日悄々地に板壁をわくとうち
敲きて長総に其ざ喃長総刀祢と申せんかん。其方ハ我を忘れし歟我ハ其方を記ありつるとのに長総
許りて某ハ和殿ハ何里の人ぞと問へバ荷二郎されバとよ我ハいぬる五月の時候百條織屋絹七と偽
名して富士川の頭よりかんすて們を騙局に掛て澳津の浦に歇店を盤費行裏その定法来

西まで咸極攫ひて走りくる。陸奥生育の物師宅。宣定の名い木綿張荷二郎我が家に出没不測の本支と年来自負する由断矢敵這地を。いま日緝捕使ふ捕へられ鈍や獄全ふ繋がれしと。報るふ長総さていとぞろ。且驚ゑ且恨めゝ過去来と思ひ出て胸ふ満る憤くの。

安瀬もあゝで。眺へ〳〵小雲時応もせぢゝと。荷二郎さそと慰めて腹立めゝる世話ふふ地獄ふも相識ありきのふい怨敵ふい同病相憐むが是人情ゑゝらゑふふあゝ。これゆゑ。こゝ。ゑゝ。

詞敵もゑゑ獄舎の艱苦ふ堪ぬ折ゝを和郎が謀られて上東西皆喪ひゝゝ。饑渇ふ逼ア。逆旅の艱難ゑが所以ふゝを我弟い寛屈の科ふ狗死ゑく。我身も這里ふ因れゝ世と面ゑ生と易るとも怨い書仇人のゑゑ。獄舎ふ繋がれい祈らぬ神も我與ふ慰めゆ天の冥罰訓身ふ是冤枉の罪ふ死をとも和郎が首と刎らゝと。て我命終りゑゝ。快く目と閉ゑゝ。悔ゝかゝゑゑ。爭奈ゑと敦圉ゑ迫て怨ゑれ。荷二郎も亦冷笑て恨ゑめゑゑ。愚痴人を騙局ふ載て畧るい是則我が生活謀られゑゑ。ん身の浅慮智の足らぬゝと。

人を恨ゑい愚ゑ。ゑゑ然い禍も胎ゑ。又福も基ゑ。ゑゑ。ゑい那青年児と。弟ゑと。ゑ。

情郎ゑ。ゑい那折ゑ我只一見で猜ゝゑ意ふ那青年児ゑ素是ゑ。ゑの密夫ゑ。他郷ぐ

夫婦ふゑんゑ惑ひ出ゑふゑゝんぞゑ。ゑゝゑゝゑゑ。ゑゑ好ゑ情由ゑ。旅宿ゑゑれい禍ゑ。是その始と原れい身ゑゑ生ゑる。錆刀ゑゑゝゑゝ命と絶ふゑ。ゑゑ青年児の狗死ゑ。ゑゑが獄舎ふ繋がれ。

も我ふ盤費と奪れゑゑ故ゑとゑゑゑゑゑゑ。徒てゑゑゑゑゑ。

醒ゑるゑゑ。悔ゝ。ゑゑ且羨ゑ。又ゑゑゑゑゑゑ。姑且と荷二郎ゑゑゑゑ。

祢我ゑゑゑゑゑゑと。俱ふ屠所の羊ふゑゑゑゑゑ。縞ふ憐ゑ心ゑゑ。今ゑゑ我ふ従ゑ。我ゑゑ身と

極ゑ然ゑゑゑゑ怨と轉ゑゑ命と延る幸ゑゑゑゑゑゑ

く程ふ件の女の子八年ふ倍さる。その性怜悧ろけ。我八然まで不心もつぞ不毛山の樵路ゝ肩ふうち乗ゝ過る程ふ女の子八路の樹の枝ふ攀ぢ登ゝ喚べども下らぞ困ゝ其里ふ立在る折ろ旅人く武士あゝ我を良ゝ見めるゝんと猜ゝ捕ゝ捕ゝ捕んとせゝれ。ぞ伴當さへまろけれ辛ゝ逃走る山路の葛藤ふ脚を引れて幾百仞ろ谷底へ落る依ふ息絶ろ。されど命運盡ぢ。その次日の曉ゝ目ふ我ゝ復ゝ獨然再生の福ふ恵まるゝ。ゝ起れて滾落ゝ折樹の根岩の稜ふ身ゝ拓傷ゝ額頭ふも脚ふも血ふ塗れる疼痛ふ堪ぢ遮莫ゝ幸ゝ照ぐ日ふ溪水洒れゝ身を浸ゝ至らぐ。然而あゝぶふ。ゝれゝ左右ゝ又舊の山路ふ分ろ登ゝ行く越の温泉ふ赴ゝ三十日許湯治ゝ拓傷ゝ稍愈ろ今ふ我全身ふ舊瘡の瘢ゝ多ゝ宴ゝ侍る故ゝれふ鄉黨ふ対ゝ虚談ゝ幼稚ゝ時ふ鎌倉ふ幡宮の石階を徒ゝ登ゝ滑ゝ足ゝ躓ゝ倒ゝ内陣ふ今ゝ開て拜ゝ縁起ゝ又只ゝ れ徒ゝ越後の寺泊或ゝ新潟越前ふ三函ゝ彷徨ゝ徘徊ゝ。這里ふ半年那首ふ二月年ふ累ゝ近屬ゝ東海道ふ流れ来ゝ一両個の伙家と俱ふ上下ゝの旅客ゝ騙局ふ掛ゝ暑ゝ錢ゝ世ふ護摩ふ灰ゝ乳ゝ身ゝ温ゝ まゝ。賭錢ゝ酒ふ皆ゝ滅ゝ做ゝ三百六十日已ゝ ゝ已ゝ られ。秘密ふ約束ふ ゝれ身ゝ騙局ふ掛ゝ後先ゝ走ゝ ゝ這地ふ来ゝ却人ふ與身ふ與ふ人一挿ゝ行ゝ ゝ計ゝ隨意做ゝ ゝ聊所得ゝ ゝ又那伙家両個ふ奴ゝ配分鈔含ゝ奥津を別れ鎌倉ふ赴ゝふ年来ふ悪事發覺れ。終ふ首ゝ喪ゝ ゝ後ゝ ゝ我身ゝ ゝ温ゝ ゝ。せゝれゝ不意ゝ討ゝ ゝ日ふ鈍ゝ ゝ捕ゝ ゝ遮莫我八死ゝ ゝ徒ゝ ゝ豫ゝ ゝ。ゝ ゝ計較措ゝ ゝ一條ふ活路ふ憑ゝ ゝ越ゝ脱ゝ ゝ他鄉ゝ走ゝ ゝ欲ゝ ゝ舊悪ゝ ゝふ。ゝ ゝ咱家ゝ ゝ従ゝ ゝ春ゝ ゝ値ゝ ゝ我妹子ゝ ゝ脱ゝ ゝ折ゝ ゝ極ゝ ゝ。苦樂ゝ俱ふ ゝ ゝ ゝ ゝ真実の商談ゝ左ふも右ふも深念ゝ決め ゝ後悔ゝ ゝ ゝ ゝ。示ゝ奸賊ふ ゝ ゝ ゝ ゝ

寃屈の罪ゐて死ゆくゐ毒茶も亦病癘よりて用ひて人の死を救ふ效験ゐ〇〇〇

山邊迄赴き桜を索ぬ件の笛を掘出して、それを果して封して符を寫してありければ金の耗るんとを怕れて、そゞ伏、袱に包み携還りて、その夜獄舍にて、荷二郎を呼せらば荷二郎姑く呪文を唱て、躯く笛をうち披くに、數も差ぬ宋錢と五枚の金内に在り。木兎六を含笑ながら、笛共倡に受收めて感歎すること大なるに、皷備るを額に加へて、連汝は賊徒に似ず、賢と愛する心あり。夜分に枷を除き、今宵よりして快く睡れよかと、耳元にて、腰に着たる鍵兒とその枷を含ませ、御恩を受くれば、なほ報ひと仕ん。小可の外も、瘞めくる金三十両と、宋錢二貫餘りあり。そも大切なる笛に藏て、又件の山路に、昨日の処と相距ること十歩許東なる、葛石の下にそ那笛は、これ勿論穿食のあとも、秘符あれば、今宵のごとく伏に、そ来て呪を唱へうち披て、咸大人にまゐらせん。今は要なる錢財なり。後世に、人の大事、それ〳〵、後は一遍の廻向を、懇ごとまつるのみとのべ、木兎六、領して、その夜はいねでもたるるに、羽立又はんと戸を鎖して、宿所に還る。光小にも告ぎ、肚裏に、ほゝえみ、歳暮の罪人、稀ゆく

此の人情に獲かぬ我兒は放蕩無頼にて、親の東西を、東西とも思ぬ。穿鑿出して、色と賭錢とに使ひ、そゞ上に愛女と、某甲に遣嫁れば、散財まうる。然るに那荷二郎が、痙攣なる金五両を、ひけらかして獲のるに、又三十両二貫文ありと告げ、妙なるかと、獨樂して、胸算用に、その終夜いねられず、次の日、平日の暇を偷て、又那山路に赴き、這里狹と思ふ石の下を、穿れば果して、あゆも赤長く、太なる笛あり。けと、食出して、又袱に包て、宿所に還る。その夜更闌に、時候夜巡りに、假托て、獄舍に入て、件の笛を、荷二郎に受食ふ呪文を、唱へうち披く、笛の内に、錢も金もあるにて、九寸五分なる匕首と、紈ねし鈎索、ようくあり。木兎六を、張燈に、光に、そゝ訝りて、それは甚麽と、問せも果ず、荷二郎は、件の刃を、見りと、抜て、木兎六が、左の脇腹、眉間、鼻と、刺して、一聲苦と、叫ぶを、突仆して、無一撃に、再申く、十々滅の刃、尖濟る血を、燕脂、木兎の、者羽にもせで、息絶けり。這段いまだ、盡さざるに、楮數、卷毎に、定限あるを、又編を、續ぎ、卷を、更く。第四集、三十一回に、解分はを、聽ねかし。

糸を吐くたくみに似てもあさまし紀
閃短刀荷二郎刺木兎六
かひまの柘植子蜘蛛のおこるひ
荷二郎
ぶく六
有像第四十二

有像賛詠一十五歌
亦是作者所自題也
開巻驚奇侠客傳第三集巻之五終
ぶく六

○著作堂手集精刋俠客傳第三集畫工筆工剞劂目次

有像一十七頁　五渡亭國貞

全卷淨書　谷川　金

剞劂第壹卷　朝倉伊八

第二より至第五　櫻木藤吉

○曲亭翁新編國字稗史畧目

開卷驚奇俠客傳第四集　嬉遊笑覽合梓發行

第三集出板後推づ〳〵発行遅延す〳〵第三集の局面詳らかざるの本集に至て悉く分解を目小六と姑娘の姫と初面合の段第四集まで三集四集と合一たるとなりその奥いよ〳〵深長なべし

たゞ〳〵く第壹集第二集毎集五卷共二十卷前年賣出置第五集来未正月開板

近世説美少年録第四輯　俠客傳追々開板の故をもて本集の續刻頗遅延に及び賜顧の君子なるひのかたへ乞ひ乞ひあれば作者曲亭翁ふたゝび促して俠客傳四集と共に刋行を畢板近日出來

同書第一輯第二輯第三輯毎輯共二卷　共十五卷既に刋布訖第五輯来未正月發販

水滸畧傳第壹集　水滸傳百八人の列傳を一人別に畧述して批評を加へたる水滸傳の始末を知るとこれにまさるべし　近刻

水滸後畫傳第壹集　水滸後傳四十回を飜譯通俗〳〵原本の趣向耳から〳〵ざる処なく筆削をよろづの通俗本と同じかず　近刻

俠客少年二書衆議評判記第一集　その書まよれば原なのまち詳らかにそなりるを十倍をよぶ曲亭翁閲　諸才子評定　近日出來

釋尊御一代記圖會

全部六冊

山田意齋叟參考

前北齋老人圖画

釋迦如来の御父淨飯大王の御即位と發端と憍曇彌摩耶両夫人の夢　如来摩耶夫人の胎内小生と託し給ふ事　憍曇彌夫人摩耶と嫉て胎内の王子の出生を妨んと道師小呪咀せしむる條　如来夢中の説法　母の子息と産の毒淨飯王藍毘尼園小花の宴　悉達太子延生の奇瑞　悉達太子御幼稚より菩提心と發し給ふ　謂釈迦提婆遺恨の始末　悉達太子宮中を出て檀特雪山小雅行給ふ　正覚成道して出山し給ふ　衆生の濟度　曳迦葉舍利弗目蓮及諸羅漢佛弟子成和解耶愉陀羅女の貞心　提婆が十悪須達月蓋両長者の信心流離王の暴悪　釈尊涅槃入滅　神力涅槃像の欠もぞ都て如来御一代の事を記し圖を加へ雑有讃本

浪花　好華堂主人著編

大伴金道忠孝圖會

全部十冊近刻

此書八天智天皇の御宇小百濟國の緣の兵と遣されし吏と育こゝ狂大臣が燈臺鬼と成ゝ謂大伴直鳥兄と討ておく家臣と押領せ奸悪大友白玉子浄見原天皇と御合戰の次第金道の生涯白虫大梟の忠義雅明が義心真鳥の奢移金道万苦と凌て文乃仇と復ゝ本領を安堵せ迫の奇妻と洩さず記せり実録なれば多論夫々遺ると如へ善と勸め悪と懲と便ゝと而已なる物本也

同上

扶桑皇統記圖會

全部十冊近刻

此書八人皇四十代天武天皇の御治世より六十代醍醐天皇の御宇迄の公事の根元宮殿寺院の草創代々の人物の行条と紀と所紹役行者安部仲丸吉備大臣衣通姫光明皇后良弁僧正弓削道鏡恵見押勝中將姫傳教大師弘法大師田村丸浦嶋が子小野篁在原行平業平小野小町僧正遍照菅丞相其外古人の実傳と探ゝ精ゝ輯録ゝ悉ゝ國画と加ゝ重宮の書ゝ

女訓　女訓躾種　全一冊　海濱菴先生述

女訓躾種は海濱菴先生が七十二才までの内小もゝ女子の為に名高き孝子の事一冊を著し渡學如文母夫人小仕孝貞の道は夫人の貞淑貞素節儉と守て操と正ゝ世昔より名と伝ゝ聞る賢女節婦の傳と掲げ婚礼の式祀法式と有つる事家職と番ゝ婦女相性名頭等迄悉ゝ其事の代方本末所の文解二十二種の教訓有その作女子も教ゝ家を治先生ふゝく心状を細推義の

[illegible]

心學五倫

全壹冊　深田柳湖先生作

人倫とは。君臣。父子。夫婦。兄弟。朋友。の五倫を
いふ。[illegible]
人ちがふ。[illegible]
仁義は道と知る。[illegible]
義理とは。[illegible]

千樂の名方

[illegible]

土賣仔赤圓　半角　白　小角　五一

一切のやまひを癒ひくだしうる効能ありて寒うるおひなし

御免

製藥所

小兒科　大和氏門司法橋精製

武州埼玉郡加須町

上方元弘所　書物店　大坂心齋橋筋博勞町　河内屋茂兵衛

取次

大阪並近在

方金新地北之町二丁目	播磨屋森六	
日本橋筋二丁目	井筒屋治兵衛	
松屋町通り二丁目南へ入	大和屋和兵衛	
松屋町通り	山城屋卯兵衛	
心齋橋筋北町西へ入	河内屋新助	
富田橋通り二丁目	藤屋吉七	
堂島西横堀橋北へ入	坂屋治兵衛	
堂島新地宮本町	河内屋茂兵衛	
堂島中之町	雜賀屋佐兵衛	
西横堀伏見町北へ入	和泉屋伊兵衛	
富田屋平兵衛		
天満十丁目青物市場南へ入	吉良屋安治郎	
堂島二丁目	紙屋屋佐助	
新町通り	松屋佐助	
北浜二丁目	大和屋佐兵衛	
長崎屋長兵衛		
博多屋清右衛門	本屋利助	
農人橋南詰	本屋佐兵衛	
心斎橋筋中之町	雜賀屋佐兵衛	
西横堀伏見町北へ入	和泉屋伊兵衛	
平野町通り	平野屋喜兵衛	
南久宝寺町二丁目筋北へ入	河内屋茂兵衛	
平野町通り	藤屋佐兵衛	
富田屋茂兵衛		
天満十丁目青物市場南へ入	吉良屋安治郎	
新町通り	紙屋

内亀好